

# 新原炭と軍艦高千穂

## 海軍炭鉱・国鉄炭鉱の遺跡群 (13)

新原海軍炭鉱の石炭は軍艦高千穂で使用されたことが知られています。でもなぜ高千穂なのか。軍艦は他にもたくさんあるのに、その用途が高千穂と特定されるのはどうしてなのでしょう。

高千穂は浪速型防護巡洋艦に分類され、その一番艦が浪速、二番艦が高千穂です。どちらも明治十八年（一八八五）にイギリスで造られました。排水量は三七〇九トン。全長は九一・四メートルで、兵員は三二五名です。日露戦争では、どちらも日本海海戦に参加しています。

問題は浪速・高千穂が新式汽罐（ボイラー）を備えていて、イギリス炭に頼らざるを得なかったことです。

海軍省は明治二十年六月、東京湾の高千穂艦で、送風器を使用した機関の試運転を行い、新原炭とイギリスのウエールズ炭の優劣について比較して、次のような報告書を作成しました。

「新原炭ノ有煙ナルハウエールズ炭ニ相劣リ、醸汽時間ノ速カナルハウエールズ炭ニ相優リ、随テ火夫ノ労ヲモ相省キ、此優劣ヲ算スルトキハ、ウエールズ炭ト殆ント同一ニシテ、格別ノ等差無之様存候。故ニ従来該調査委員ニ於テ試験ヲ遂ケシ本邦産ノ石炭中ニテハ、最モ卓出ノ品質ニ有之候条、別紙丙号比較表共相添、此段及御届候也。（表、甲号・乙号略。丙号は左頁）」＝ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C06090815000（第8

このことを聞き付けた参謀本部は小躍りし、海軍省に新原炭鉱の開発を急ぐよう泣きつきます。同年十月十九日、参謀本部次長仁礼景範は海軍大臣西郷従道に、言わずもがなの念入りな文書を送っています。

「海軍戦闘ノ勝敗ハ大ニ艦船ノ速力ニ関係スルヲ以テ、良好ノ石炭ハ海軍第一ノ必需品タルハ論ヲ俟タサルナリ」という書き出しで、艦長が軍略に優れ、将校・兵士の訓練が行き届き、兵器は精巧で、弾薬が豊富であっても、良質な石炭がなければ宝の持ち腐れになると、海軍における石炭の重要性を説明します。その上で、唐津炭は火力薄弱で旧式汽罐では何とか使えるが、「新式汽罐（浪速、高千穂）ニ於テ送風器ヲ使用スルトキハ、風力強キニ

過キ」、「速力ヲ短縮シ航程ヲ減スル等ノ不都合アリ」と言います。

そこで「浪速、高千穂艦ハ唐津炭ニ於テハ汽力ヲ得サルヨリ、英仏炭ヲ購買使用シ来ル」が、万一英仏を敵に回したとき、あるいは他国を敵に回した場合でも英仏が日本への石炭供給を停止したときは、「新式艦船モ亦無用ノ長物」となる。仮に英仏からの購入が可能でも戦時には価格は高騰するであろう。

「之等ヲ熟考スルトキハ何分速ニ新原炭御着手アルヲ上策トス」と、海軍省へ一日も早い開坑を促したのでした。＝ JACAR：C06090815000（第19画像目）

これに対し、十月二十六日、海軍大臣名で次のように返答したようです。「本礦著手之義ニ付而者、目下其主務ニ於テ而計画調査中ニ有之、追而処分之上ハ、可及御通報候条、右ヲ御了知有之度、此段及御答候也。」

JACAR：C06090815000（第17画像目）

言われなくとも、ちゃんと進めています。黙って待つていて下さい、という感じの返答です。海軍省が全国各地の石炭を検査した結果、「筑前国糟屋郡新原炭ノ特種ナルヲ見出し」たことに、参謀本部はまさに光明を見出したのでした。それなくしては新式艦浪速と高千穂は能力を発揮できず、「無用ノ長物」となってしまう恐れが現実にあったからです。

### 丙号

#### 高千穂艦機関送風器使用英国并新原石炭 試焚成績比較

炭名	機械馬力	平均速力	毎時開送風消費	毎海里開送風消費	毎一馬力炭消費
英國炭	一一八六六	一七、六二四	一九〇五〇斤	一〇七一九斤	三、〇七五斤
新原炭	一一九、二五	一七、八八五	一七二〇〇斤	九六一四斤	二、八五斤

#### 備考

英炭使用ノ時吃水拾八呎拾一吋 排水量三千七百九拾噸  
 新原炭使用時吃水拾八呎八吋 排水量三千七百八拾八噸

表・丙号 = JACAR: C06090815000 (第16 画像目)